

第3章

水戸市の歴史文化の特性

那珂川の夕暮れ 水戸の歴史文化の特性の一つ「水」を象徴する文化財です。



第3章

水戸市の歴史文化の特性

第1章、第2章を踏まえて、第3章では、本市ならではの歴史文化の特性を整理します。

1 本市の歴史文化の考え方

「水戸」という地名が示すように、大地の成り立ちから現代に至るまで、本市の歴史は水とともにあり、特徴ある地質と肥沃な穀倉^{こくそう}地帯をもたらしました。そこで人々は農業を営むことにより集団化し、多様な文化、信仰、習俗、そして争いをもたらしました。

人々の営みは次第に発達し、古代以降、本市には政治・経済・産業・軍事の中核としての都市が形成されていきました。

特に近世には水戸徳川家の膝元^{ひざもと}として水戸独自の個性が育まれ、現在の県都水戸につながっています。

地域計画では、こうした本市の歴史文化の中から「水」、「農業」、「都市」、「水戸（徳川）家」及び「信仰」のキーワードを抽出し、次に掲げる五つの特性を本市の歴史文化の特性として設定します。

- 特性1 「水」ではじまる水戸の歴史
- 特性2 繁栄^{みなもと}の源は農業にあり
- 特性3 茨城の真ん中で発展したまち
- 特性4 水戸家は天下の副将軍
- 特性5 願いよ届けー信仰と祈りの歴史文化ー

2 五つの歴史文化の特性

(1) 特性1 「水」ではじまる水戸の歴史



水戸の大地をくまなく流れる「水」は、先人たちと共にあり、水と深く関わる歴史文化が各時代に形成されました。

本市は那珂川・涸沼川の二大河川とその支流が市内をくまなく流れ、海進・海退の繰り返しによって鶏足山塊、丘陵地、台地、低地の複雑な地形が形成され（→19ページ）、水系の結節点としての「水戸」が誕生しました。

水是水戸の先人と共にあり、各時代・各地域の歴史文化の特性に深く関わっています。



備前堀(本町～平戸町)

1610(慶長15)年、農業用水と千波湖の治水対策のため、伊奈備前守忠次により開削されました。総延長は千波湖(当時)から涸沼川まで約12キロあり、近世から現在まで利用される貴重な水資源です。



芦山浄水場(渡里町)

1932(昭和7)年に竣工した浄水場です。揚水機と送水機を設置した鉄筋コンクリート造の建屋と事務所棟が現存しています。水戸の近代水道を知る重要な近代化遺産です。

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

資料



枝川の渡し(城東)

水戸城下の細谷と那珂川左岸の枝川を結ぶ渡しです。新舟渡と呼ばれ、岩城相馬街道の渡河点でした。



曝井(愛宕町)

万葉集や常陸国風土記に記述がある有名な湧水地です。ここ愛宕町滝坂の地が有力候補地になっており、1878(明治11)年建立の石碑が立っています。



渡里湧水群(渡里町)

東茨城台地と田野川に挟まれた斜面緑地と河川敷からなります。延長約750メートルの範囲に、古くから生活・農業用水等に利用されてきた7か所の湧水があります。

縄文時代には、海進によって水戸は温暖な気候と遠浅のラグーンに囲まれた暮らしやすい地となり、海岸沿いの台地上に大串貝塚、谷田遺跡等の貝塚や集落が、河川沿いに渡里町遺跡、坏遺跡、下畑遺跡等の集落が形成され、縄文文化が花開きました。

古墳時代から古代は、愛宕山古墳や台渡里官衙遺跡群といった中枢となる遺跡が河岸段丘¹の縁に形成され、河川からの眺望を意識して造営されました。また、万葉集に詠われた曝井等の水場は、人や物資が行き交う結節点でもありました。

中世には河川が武士団の領域の境界となり、河岸段丘上には数々の城館が築られました。また、桜川等の中小河川も、領域支配の上で欠かせない水上交通路となりました。

近世になると、那珂川・涸沼川水運は、地域内輸送はもとより、「内川廻し」と呼ばれる奥州・下野方面から江戸に至る物流ルートの一つとなります。両河川沿いには複数の河岸が設けられ、陸上交通と結節し、地域にとって不可欠の交通の大動脈になりました。

¹ 河岸段丘：川の流れに沿ってつくられた階段状の地形のこと。



さらには、水戸城の防御や偕楽園の借景²に利用された干波湖、上水道として敷設された笠原水道、農業用水として敷設された備前堀など、水と地域との関わりは多様化していきました。

近代以降も、渡里湧水群などの湧水が農業用水として利用されるとともに、近代水道の整備により、芦山浄水場や水戸市水道低区配水塔等の近代的水道施設が敷設されました。

コラム 「水戸」の地名はいつから使われた？

「水戸」という地名は、応永年間（1394年～1428年）のものと推定される吉田薬王院文書に現れたのが早い例とされています。その後しばらくは同じく海水の出入口を意味する「江戸」と併用されることが多く、1591（天正19）年に佐竹氏が水戸城を本拠とした時期あたりから「水戸」もしくは「三戸」が用いられ、やがて「水戸」が定着したと考えられています。

(2) 特性2 繁栄の源は農業にあり



肥沃な大地を基盤として発達した農業は、集落遺跡、古墳、城館、戦争遺跡など、多様な歴史文化を育み、本市の繁栄の源となりました。

本市の肥沃な大地は農業に最適で、豊かな実りをもたらし、本市の繁栄の源となるとともに、特色ある歴史文化を育んできました。

稲作が開始された弥生時代の遺跡は、他時代と比べ件数は少ないものの、薬王院東遺跡や見川塚畑遺跡等の弥生時代後期（1世紀中頃～3世紀中頃）の集落が上市台地や東茨城台地上に展開していました。

こうした集落遺跡の分布は、農耕の分布とほぼ重なります。本市の集落遺跡の数は古墳時代から古代のものが多く、市内各地に大小様々な集落が形成され、農業を営んでいました。

市内西部の友部丘陵から連なる四つの支丘（田島支丘、牛伏支丘、有賀・中原支丘及び杉崎支丘）に展開する牛伏古墳群をはじめとする大小多くの古墳群は、周辺に広がる穀倉地帯を統治した首長の墓と考えられています。この穀倉地帯は中世には「中妻三十三郷」と呼ばれ、鯉淵城・赤尾関城など、本市で最も多くの城館が集中して築かれています。こうしたことから、中妻三十三郷からもたらされる穀物は、江戸氏の躍進を支える重要な財源になったと考えられています。

市内東部では、古代の大集落である東前原遺跡・小原遺跡や中世平戸氏の本拠である平戸館等の遺跡が展開し、台地上はもとより低地でも農耕が営まれたことを示しています。

²借景：造園技法の一つ。庭園の外にある湖や林などの風景について、庭を形成する背景として取り入れたもの。



親鸞聖人御田植の伝承地(飯富町／市認定史跡)

親鸞の生涯を描いた「御絵伝」にある真仏寺の御田植伝説の伝承地です。親鸞ゆかりの御田植歌は地域や信者の間で広く知られました。



大根むき花(元石川町／市指定無形民俗文化財)

大根を材料に、一丁の包丁だけで牡丹や菊等の花を作り、祝いの座に飾られました。農村ならではの珍しい民俗芸能です。



見川塚畑遺跡(見川／茨城県教育財団提供)

2016(平成28)年に実施された発掘調査では、弥生時代後期の集落跡が発見されました。この地に定住し、農耕を行っていたものと考えられます。

平戸館(平戸町)

中世平戸氏の拠点とされる城館跡です。沖積低地に広がる田園地帯の中にあり、農耕地帯を統治しやすい場所に築城されました。



満蒙開拓幹部訓練所 事務棟・講義棟(鯉淵町／市認定建造物)

満蒙開拓団や義勇軍の指導者を養成するため、満州移住協会が1938(昭和13)年に開設し、翌年施設を新設しました(現鯉淵学園)。事務棟・講義棟は、満蒙開拓の歴史を今に伝える、現存する数少ない建造物です。



近世になると検地^{けんち}が行われ、水戸藩によって農業の管理が強化されるとともに、新田開発による農業の増産が推進されました。近世に遡^{さかのぼ}る「農」に関わる文化財としては、備前堀^{あきなりしん}や秋成新田^{あきなりしん}等の農業関連遺構、五穀豊穰^{ごこくほうじょう}を願う御田植^{おたうえ}等の伝承や祭礼、大根むき花^{だいこんばな}といった作物を用いた特殊な民俗芸能など、多様な文化財が各地に存在しています。

近代になり都市化が進むと、農業は市街地向けの野菜の生産が拡大し、都市近郊型農業が定着していきます。こうした農業基盤の整備のため大規模な耕地整理事業が行われ、各時代の世相に応じて中沢池^{なかざわいけ}の浚渫^{しゅんせつ}工事や千波湖^{せんぱこ}の干拓等が行われました。

昭和恐慌から戦中にかけては、農本思想^{のうほんしそ}³が皇国史観^{かんこくしかん}⁴や帝国主義^{ていこくしぎ}⁵と結び付き、満蒙開拓青少年義勇軍の国内唯一の訓練所として内原訓練所^{うちはらくんれんじょ}が設置され、農事訓練・軍事訓練・皇国精神涵養^{かんこくしんしんかんよう}が一体となった特殊な訓練が行われました。本市には渡満道路^{とまんどうろ}、弥栄神社^{いやさかじんじや}、満蒙開拓幹部訓練所跡^{かんこくしんしんかんよう}、武具池^{ぶぐいけ}など、「鉄の戦士」と呼ばれた満蒙開拓青少年義勇軍関連の遺構が多数残っており、農事と軍事が混交^{こんこう}した国内でも希少な文化財群と言えます。

³農本思想：立国の基礎を農業に置くことを主張する思想のこと。

⁴皇国史観：日本の歴史を万世一系の天皇を中心とする国体の発展・展開ととらえる歴史観のこと。

⁵帝国主義：19世紀後半以降、欧米や日本などの列強国が領土や植民地の拡大を求めて海外に進出した動きのこと。



(3) 特性3 茨城の真ん中で発展したまち



水戸市は茨城の中央に位置することから、政治や経済の中心都市として発展し、官衙や城郭をはじめ、産業や戦争関連の文化財も多く伝わりました。

本市は、県内の地区区分において「^{けんおう}県央」に区分されるように、茨城の真ん中に位置しています（→18ページ）。こうした立地から、中央集権国家が誕生した古代より、本市は政治・社会・経済の中心地としての土地利用がなされ、発展していきました。

古代には^{なかくんぐうけ}那賀郡の郡家として^{たいり}台渡里官衙遺跡群が、中世には^{だいじょうし}大掾氏・江戸氏・佐竹氏の本拠として^{みとしょう}水戸城が領域の中心となりました。

近世になると水戸城及び^{みとしょうかまち}水戸城下町（^{そうがき}水戸城惣構→42ページ）は飛躍的に拡大し、常陸国の中心としての地位を確立しました。上町・下町には武家地とともに町人地が作られ、水戸城下町は水戸藩の産業の中心地としての機能を有し、^{すいふちやうちん}水府提灯、^{みとぐろ}水戸黒、^{みとぼり}水戸彫など、今に続く伝統産業が育まれました。また、幕末期には^{しちめんせいとうじょう}七面製陶所で陶磁器の生産を始めるなど、藩が^{しよくさんこうぎょう}殖産興業⁶を主導していきました。

近代以降も水戸城下町は本市の中心市街地として栄え、^{きゅういばら}旧茨城県庁舎、^{きけんちやうしや}泉町会館、^{いずみちやうかいかん}水戸芸術館など、特徴ある建造物が建っています。

また、近代は現在の茨城大学周辺に^{りくぐんえいじゅ}陸軍衛戍が設置され、本市は^{ぐんと}軍都としての性格も帯びます。そのため、^{おおいちやう}大銀杏、^{きむらけじゅうたく}木村家住宅、^{みとくうしゅういこう}水戸空襲遺構、^{きゅうかわさきぎんこう}旧川崎銀行水戸支店等の水戸空襲により被災した遺構や戦争語り部による^{せんそう}戦争の記憶^{きおく}など、戦争関連の有形・無形の文化財も多いのが特色です。



水府提灯(新莊・袴塚・本町)

水戸藩は提灯の製造を奨励し、「一本掛け」の技法による堅牢な水府提灯が生まれました。以来、水戸は岐阜、八女(福岡市)と並ぶ三大産地の一つとして隆盛しました。



大銀杏(三の丸)

このイチョウは1945(昭和20)年8月2日の水戸空襲で黒焦げになりましたが、戦後新しい芽が生え復活しました。以後、戦後復興・平和のシンボルとして市民に愛されています。

⁶殖産興業：生産を増やし、産業を盛んにすること。



台渡里官衙遺跡群
(渡里町／国指定史跡)

古代那賀郡は常陸国最多の22の郷を統治する巨大な郡でした。その中心地となるのが台渡里官衙遺跡群で、寺院や正倉が立ち並んでいました。

水戸城と旧茨城県庁(三の丸)

1871(明治4)年の廃藩置県後、最所の県庁は水戸城三の丸内の弘道館に置られました。以後、1999(平成11)年に笠原町に移転するまでの約130年間、旧水戸城域が県政の中心でした。



(4) 特性4 水戸家は天下の副将軍



御三家水戸藩による治世は、その後の本市の歴史文化に大きな影響を及ぼし、
徳川光圀・斉昭をはじめ水戸家関連の文化財が多く伝わりました。

水戸藩は「御三家」の一つとして高い家格を有するとともに、藩主が江戸にいる期間が長いという特徴がありました。こうした他藩との違いは藩内の人々に広く共有され、近代以降に広まった「水戸家は天下の副将軍である」という意識につながっていきました。幕府には「副将軍」という職はありませんでしたが、御三家意識や副将軍意識は、近世・近代の水戸独自の個性として、本市の歴史文化に大きな影響を及ぼしました。

今日の県都水戸の基盤の多くは、こうした水戸藩による約260年間にわたる治世によって形成されたと言っても過言ではありません。



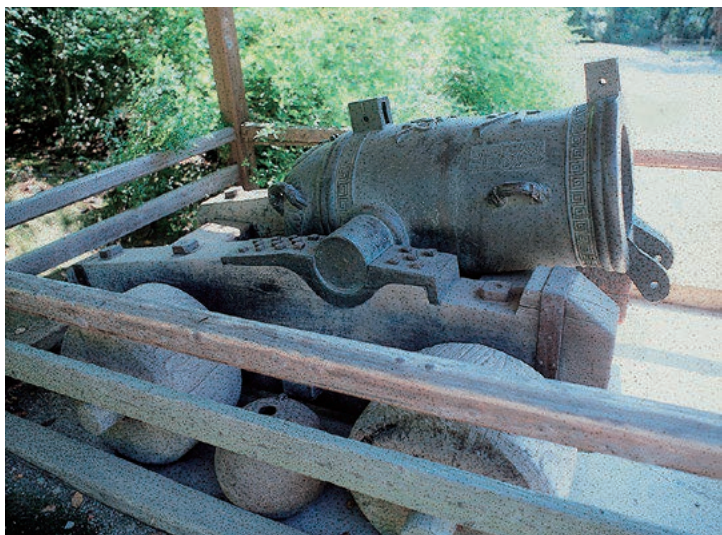
銅製経筒(神崎寺所蔵／県指定工芸品)

平安時代末期の経筒で、1687(貞享4)年に神崎寺境内から出土し、光圀に献上されました。光圀は外箱を作成し、寺に保管させました。光圀の文化財保護への関心の高さを示しています。



大日本史編纂記録(茨城県立歴史館所蔵／市指定歴史資料)

光圀の命で開始した『大日本史』編さん事業の過程において作成された資料群です。彰考館員間で交わされた手紙の案文を中心にまとめられた貴重な資料です。



太極砲(常磐神社所蔵／市指定工芸品)

1842(天保13)年から翌年に徳川斉昭が設計・鑄造させた大砲です。砲身には斉昭筆になる「太極」が陽刻され、1853(嘉永6)年に幕府に献上されました。

千束原追鳥狩本陣跡(元石川町／市指定史跡)

追鳥狩は、徳川斉昭が行った大規模な軍事演習です。1840(天保11)年の第1回演習がここ千束原で行われました。1864(元治元)年、本陣跡に村民が斉昭を祀る小祠を建て、現在に至ります。





特に、第2代藩主徳川光圀・第9代藩主斉昭は藩史に残る大事業を手掛けたことから、光圀・斉昭関連の文化財は現在も数多く残っています。

光圀関係の主な文化財としては、**徳川光圀書翰集**、**銅製経筒**、**六地藏寺法寶藏**、**笠原水道**、**義公生誕の地**、**常葉山時鐘**、**左近詠草**、**大日本史編纂記録**等があります。

斉昭関係の主な文化財としては、**旧弘道館**、**常磐公園**（偕楽園）、**太極砲**、**陣太鼓**、**安神車**、**刀**（徳川斉昭作）、**七面製陶所跡**、**千束原追鳥狩本陣跡**等があります。

また、本市の名前を冠した水戸黄門は、近代以後の講談や映画、1969（昭和44）年に放送が開始したテレビドラマ「水戸黄門」によって国民的キャラクターになりました。キャラクターとしての水戸黄門と、「この紋所が目に入らぬか」でお馴染みになった葵の紋所は、市民が水戸黄門一行に扮したおもてなし、水戸黄門漫遊マラソン、水戸ホーリーホック等のプロスポーツ、**水戸黄門まつり**、水戸市マスコットキャラクター「みとちゃん」などに活用され、水戸らしさの象徴の一つとして定着しています。

(5) 特性5 願いよ届けー信仰と祈りの歴史文化ー

信仰と祈りは人々の心の拠り所となり、寺院、神社、仏像等の宗教遺物、祭礼など、豊かな歴史文化を育みました。

科学技術が発達していなかった時代、人々の心の拠り所となったのが、信仰と祈りでした。日照り、水害、地震、疫病など、生活や生命を脅かす厄災を取り払い、豊かで健康な暮らしを手に入れたらという願いを神仏に届けるため、人々は神社や寺院を建て、仏像を作り、祭りを催しました。

本市に残る文化財の中で大きな割合を占めるのが、こうした信仰と祈りに関わる歴史文化です。

特に、本市には**薬王院**、**六地藏寺**、**佛性寺**、**善重寺**、**和光院**等の寺院、**吉田神社**、**八幡宮**、**大井神社**等の神社のような、古刹や中核的な寺社が集積しているのが特徴です。これらの寺社には、**木造十二神将像**（薬王院）、**絹本着色両界曼陀羅**（六地藏寺）など、多数の宗教遺物が伝世しています。

このような中核的寺社のほかに、**杉崎八幡神社**、**中原不動尊**、**春日神社**、**赤沼山薬師寺**といった村落内寺社も市内各地に現存しており、**阿弥陀如来立像**（吉沼観音堂）や**十一面観音像**（持福院）等の信仰を集めた仏像類が伝世しています。

また、建造物や宗教遺物以外にも、**大串ささらばやし**、**大野みろくばやし**、**水戸の獅子舞**、**吉田神社の秋季祭礼**、**有賀神社の磯渡御**、**向井町の散々楽**といった無形の民俗文化財や市内に無数にある**庚申塔**等の石造物が、地域ごとにある多様な講や信仰を反映した文化財として、現在に伝わっています。

さらには、水戸藩は神道や儒教による葬祭を奨励したことから、**常磐共有墓地**、**酒門共有墓地**等の儒式墓地はもとより、**林十江の墓石**等に見られる水戸藩独自様式の儒式墓標が造立されるなど、神道・儒教・仏教が混交した特色ある信仰と祈りが展開しました。



阿弥陀如来立像(吉沼観音堂保存会所蔵／市指定彫刻)

平安時代末期の制作と見られる阿弥陀如来像です。現在は吉沼観音堂に安置されていますが、かつては阿弥陀院という寺院の本尊でした。市内最古級の仏像です。



佛性寺本堂(栗崎町／国指定重要文化財)

佛性寺本堂は1585(天正13)年に建立された仏教建築で、県内に類例のない八角円堂が特徴です。江戸氏家臣の立原氏が建立に関与したと考えられています。



有賀神社の磯渡御(有賀町／市指定無形民俗文化財)

有賀神社の例大祭です。神社から大鉾を持った行列が練り歩き、水戸城下を経て大洗磯前神社の間を巡幸します。中世末の祭礼の記録があり、古くから親しまれてきた宗教行事です。



常磐共有墓地(松本町／市指定史跡)

1666(寛文6)年、酒門共有墓地とともに造営された藩士専用の儒式の共同墓地です。儒教を重んじた水戸藩の宗教改革を物語る史跡です。



**絹本着色両界曼陀羅
(六地藏寺所蔵／県指定絵画)**

金剛界曼荼羅(左)と胎藏界曼荼羅(右)からなる、真言密教教理の根本を示す仏教絵画です。室町時代前半の制作と見られ、六地藏寺開山以来、大切に受け継がれてきたものです。

第4章

文化財に関する 既往の把握調査

市内遺跡の発掘調査

本市では毎年多くの発掘調査を実施しており、本市の歴史の
解明に大きく寄与しています（写真は堀町にある西原古墳群）。



第4章

文化財に関する既往の把握調査

本市では、過去にどんな文化財調査が行われてきたのでしょうか。第4章では、県、市、大学及び個人が実施した主な調査と、その課題を整理します。

1 文化財に関する調査の概要

本市の文化財調査は、市（旧常澄村、旧内原町を含む。）による自治体史編さんに伴う調査や、県による未指定文化財や中世城館等の緊急調査又は総合調査等により、文化財の全体像の把握が進みました。

また、県立歴史館、県近代美術館、市立博物館等の博物館、県教育財団、市埋蔵文化財センター等の埋蔵文化財調査機関、茨城大学等の研究機関は、継続して調査・研究を進めており、現在の文化財調査を牽引^{けんいん}しています。

さらに、教育遺産世界遺産登録推進協議会等による「近世日本の教育遺産群」の世界遺産登録に向けた調査・研究は、広域にまたがる文化財をつなぐシリアル型と呼ばれる視点から、既存の文化財を再評価する取組を行っており、注目されます。

文化財調査とその成果品（刊行物）の一覧は表4-1・2のとおりです。

調査名	調査主体	調査年度	刊行物(表4-2参照)
茨城県史編さん事業	県	1964-1995	1・2
水戸市史編さん事業	市	1959-1998	3・4・5・6
常澄村史編さん事業	常澄村	1983-1994	7・46
内原町史編さん事業	内原町	1986-1995	8・9・26・31・47・48
水戸の水道史編さん事業	市	1979-1983	11
茨城県民家緊急調査	県教育委員会	1966・1974	17
茨城県近世社寺建築緊急調査	県教育委員会	1981	18
未指定有形文化財調査	県教育委員会、市教育委員会	2000-2004	-
近代化遺産総合調査	県教育委員会	2005-2006	19
茨城県祭り・行事調査	県教育委員会	2007-2009	29
近代和風建築総合調査	県教育委員会	2015-2016	20
茨城県歴史の道調査事業	県教育委員会	2010-2014	33
中世城館跡総合調査	県教育委員会	2018-2022	34
地上文化財調査	市、市教育委員会等	継続中	10・21・30・36
埋蔵文化財調査	県教育財団、市教育委員会、茨城大学等	継続中	42・43・44
博物館による調査・研究	県立歴史館、県近代美術館、市立博物館等	継続中	12・13・14・22・23・24・27・28・38・39
教育遺産世界遺産登録推進事業	教育遺産世界遺産登録推進協議会等	継続中	15・16
平和事業	市	継続中	49
多面的な緑の保全、緑化推進事業	市等	継続中	40・41
個人・団体等による文化財調査・研究	個人・団体等	継続中	25・32・35・37・45

表4-1 既往の調査一覧



刊行物名	発行	発行年
文化財一般		
1 『茨城県史』全7巻	県	1972-1986
2 『茨城県史料』全50巻	茨城県	1967-1996
3 『水戸市史』全9巻	市	1963-1998
4 『概説水戸市史』	市	1999
5 『水戸市近現代年表』	市	1991
6 『水戸の町名』	市	1985改訂
7 『常澄村史』全2巻	常澄村	1989-1994
8 『内原町史』通史編	内原町	1986
9 『満蒙開拓と青少年義勇軍』	内原町	1998
10 『水戸の先人たち』	市教育委員会	2010
11 『水戸の水道史』全3巻	市	1984
12 市立博物館(歴史・民俗部門)発行の図録	市立博物館	刊行中
13 県立歴史館発行の図録	県立歴史館	刊行中
14 県立歴史館発行の報告書	県立歴史館	刊行中
15 『近世日本の学問・教育と水戸藩』全3冊	市	2010-2012
16 『近世日本の教育遺産群国際シンポジウム報告書』	教育遺産世界遺産登録推進協議会	刊行中
建造物関係		
17 『茨城県の民家』	県教育委員会	1976
18 『茨城県の近世社寺建築』	県教育委員会	1982
19 『茨城県の近代化遺産』	県教育委員会	2007
20 『茨城県近代和風建築総合調査報告書』	県教育委員会	2017
21 指定文化財の建造物修理調査報告書	市等	刊行中
絵画・彫刻・工芸品・書籍・典籍・歴史資料関係		
22 県立歴史館発行の報告書	県立歴史館	刊行中
23 県近代美術館の図録	県近代美術館	刊行中
24 市立博物館(美術部門)の図録	市立博物館	刊行中
25 『水戸の橋ものがたり』	水戸まちづくりの会	2011
古文書関係		
26 『内原町史料』全3巻	内原町	1987-1989
27 『石河明善日記』全6巻	市立博物館	刊行中
28 『茨城県立歴史館史料叢書』	県立歴史館	刊行中

刊行物名	発行	発行年
民俗文化財・民話・伝説関係		
29 『茨城県の祭り・行事』	県教育委員会	2010
30 『水戸市民俗文化財調査報告書』	市	1977
31 『内原町史』民俗編	内原町	1997
32 『水戸の民話』	藤田稔	1998
遺跡(史跡)関係		
33 『茨城県歴史の道調査事業報告書』全5冊	県教育委員会	2013-2015
34 『茨城県の中世城館』	県教育委員会	2023
35 『史跡めぐり水戸八景碑』	但野正弘	1997
36 『八景の分布と最近の研究動向』	国立環境研究所	2007
37 『水戸の坂道、水戸の風景』	水戸まちづくりの会	2018
動物・植物・地質鉱物(天然記念物)関係		
38 市立博物館(自然部門)の図録	市立博物館	刊行中
39 市立博物館刊行の自然関連報告書	市立博物館	刊行中
40 『河川生物生息実態調査報告書』	市	刊行中
41 『水戸の自然ガイドBOOK』	市	2017
埋蔵文化財関係		
42 水戸市発行の埋蔵文化財発掘調査報告書	市教育委員会等	刊行中
43 茨城県発行の埋蔵文化財発掘調査報告書	県教育財団等	刊行中
44 大学等発行の埋蔵文化財発掘調査報告書	茨城大学等	刊行中
石造物関係		
45 『水戸の石仏』	海野庄一	1992
46 『石仏・石塔調査ー常澄中学校学区ー』	市大串貝塚ふれあい公園	1997
47 『内原町の石仏・石塔』	内原町史編さん委員会	1993
48 『内原町の記念碑』	内原町史編さん委員会	1997
戦争の記憶関係		
49 『水戸空襲戦災誌』	市	1981

表4-2 刊行物一覧



2 文化財に関する調査の現状と課題

本市の文化財に関する調査は、調査主体、調査年度、調査方法、調査対象等により、調査状況の進捗に差が生じています。

表4-3は、文化財の類型毎の調査の現況・課題をまとめたものです。

有形文化財（歴史資料を除く。）、記念物、文化的景観、伝統的建造物群、埋蔵文化財、文化財の保存技術、その他の文化財（石造物を除く。）は、調査が進み、おおむね把握できています。

歴史資料及び無形文化財は、近年、文化財指定や市地域文化財認定で増加傾向にある類型の文化財です。「木村家住宅 水戸空襲遺構（附焼夷弾1点）」（2022（令和4）年市地域文化財認定→72ページ）、「水戸の座敷舞」（2025（令和7）年市地域文化財認定→72ページ）など、従来の指定等文化財にはなかったユニークな視点による評価が増加の要因となっています。こうした状況から、歴史資料と無形文化財は、今後も増加が見込まれる分野であり、調査による確認が必要です。

民俗文化財は、調査から30年～50年が経過しており、この間、有形・無形の民俗文化財が変容又は途絶えている可能性があります。そのため、更なる現状確認が必要です。

石造物は、これまで旧常澄村域、旧内原町域で行政による調査が行われるとともに、旧水戸市域で個人による調査が行われていますが、調査方法や対象が一定ではないことから、統一的に把握するための再調査が必要です。また、近年、社会構造の変化により「墓じまい」が進行し、墓地にある中～近世墓標が文化財として扱われないまま廃棄されることが指摘されているため、墓標も調査対象とする必要があります。



民俗文化財の調査

民俗文化財の調査では、祭りに実際に関わっている人に、決まり事や言い伝えを取材するなど、文字や形に残らない無形の情報を記録していきます。

石造物の調査

石造物の調査では、墓地などにある石造物を一つ一つ観察し、形、銘文、法量、石質などの情報をカード等に記録していきます。





種類		調査状況	現況・課題
有形文化財	建造物	○	おおむね把握できています。
	絵画	○	おおむね把握できています。
	彫刻	○	おおむね把握できています。
	工芸品	○	おおむね把握できています。
	書跡・典籍	○	おおむね把握できています。
	古文書	○	おおむね把握できています。
	考古資料	○	おおむね把握できています。
	歴史資料	△	未指定有形文化財調査により一定の把握はできていますが、歴史資料に分類すべき資料が増大していることから、更なる調査が必要です。
無形文化財		×	未調査です。文化財とすべき範囲の拡大に伴い、無形文化財に分類すべき資料が増大していることから、調査が必要です。
民俗文化財	有形の民俗文化財	△	1970～90年代の民俗文化財の状況は把握できていますが、調査からかなりの時間を経ており、更なる調査が必要です。
	無形の民俗文化財	△	1970～90年代の民俗文化財の状況は把握できていますが、調査からかなりの時間を経ており、更なる調査が必要です。
記念物	遺跡(史跡)	○	おおむね把握できています。
	名勝地(名勝)	○	おおむね把握できています。
	動物・植物・地質鉱物(天然記念物)	○	おおむね把握できています。
文化的景観		○	おおむね把握できています。
伝統的建造物群		○	おおむね把握できています。
埋蔵文化財		○	おおむね把握できています。
文化財の保存技術		○	おおむね把握できています。
その他の文化財	石造物	△	供養塔はおおむね把握ができていますが、記念碑や墓標については地域によって偏差が生じており、更なる調査が必要です。
	行事・イベント	○	おおむね把握できています。
	特産品	○	おおむね把握できています。
	戦争の記憶	○	おおむね把握できています。
	民話・伝説	○	おおむね把握できています。
	遊び	○	おおむね把握できています。
	水戸の景観	○	おおむね把握できています。

○ 調査が進んでいる △ 調査が進んでいない × 未調査

表4-3 文化財の把握調査状況

3 文化財に関する市民意識

(1) 「あなたと描く水戸の未来」 市民1万人アンケート

本市では、水戸市第7次総合計画「みと魁・Nextプラン」の策定や今後の政策立案に向けて、「あなたと描く水戸の未来」市民1万人アンケートを実施しました。

調査期間は2022（令和4）年5月で、調査対象は10,002人でした。

文化財の保存・活用に関連する設問及び結果は次のとおりです。

① 本市の印象

本設問は、「本市をどのように感じているか」について、27項目の選択肢の中から回答を求めたものです。アンケートの結果、「歴史と伝統がある」が1位でした。「水戸は歴史と伝統のあるまち」という印象は、多くの市民が共有していると判断できます。また、「図書館や博物館、文化施設などが充実している」が10位、「音楽、美術などの芸術鑑賞や文化活動の機会が多い」が15位など、「文化財や芸術文化に関わる施設や機会が普通以上にある」と



市民が認識していると判断できます。一方、「祭りや防災訓練など地域の行事が盛んである」の設問は下から5番目の22位という結果になっており、文化財の保存・活用を下支えする地域のつながりの希薄化がうかがえる結果となっています。

項目	歴史と伝統がある	図書館や博物館、文化施設などが充実している	音楽、美術などの芸術鑑賞や文化活動の機会が多い	祭りや防災訓練など地域の行事が盛んである
順位(点数)	第1位(94.7)	第10位(33.2)	第15位(5.3)	第22位(-27.3)

表4-4 本市の印象
(文化財関連項目のみを抽出／出典:『—あなたと描く水戸の未来— 市民1万人アンケート報告書』2022年)

② 施策の現状に対する満足度・重要度

本設問は、「現状に対する満足度」、「今後の重要度」について、38項目の施策の中から回答を求めたものです。アンケートの結果、現状の満足度は、「図書館、博物館、文化施設などの整備」が4位、「地域の文化、伝統の継承・保存の推進」が7位、「芸術・文化活動の振興」が9位など、文化財関連施策の満足度が高い結果となりました。一方で今後の重要度については、「図書館、博物館、文化施設などの整備」が30位、「地域の文化、伝統の継承・保存の推進」が29位、「芸術・文化活動の振興」が36位となりました。同設問の上位の回答は災害対策（1位）、総合医療対策（2位）、防犯（3位）で、市民の生命に直結する施策と比べると、施策の重要度は相対的に低いと市民が感じていることがうかがえます。

項目	図書館、博物館、文化施設などの整備		地域の文化、伝統の継承・保存の推進		芸術・文化活動の振興	
設問	現状の満足度	今後の重要度	現状の満足度	今後の重要度	現状の満足度	今後の重要度
順位(点数)	4位(42.5)	30位(74.1)	7位(24.9)	29位(74.5)	9位(22.9)	36位(61.2)

表4-5 施策の現状に対する満足度・今後の重要度
(文化財関連項目のみを抽出／出典:『—あなたと描く水戸の未来— 市民1万人アンケート報告書』2022年)

③ 市民と行政との協働

本設問は、「どのような地域活動に参加したいか」について、14の項目の中から回答を求めたものです。アンケートの結果、「芸術文化やスポーツの振興を図る活動」が6位、「観光の振興を図る活動」が7位で、中位以上の回答でした。「芸術文化や観光振興の活動に参加したい」と思う市民が一定程度いることがうかがえます。

項目	芸術文化やスポーツの振興を図る活動	観光の振興を図る活動
順位(点数)	6位(18.2)	7位(15.1)

表4-6 参加したい地域活動
(文化財関連項目のみを抽出／出典:『—あなたと描く水戸の未来— 市民1万人アンケート報告書』2022年)

④ 本市の魅力ある資産

本設問は、「次の世代に残したいもの」として22項目から回答を求めたものです。アンケートの結果、1位が偕楽園、2位が千波湖、3位が弘道館、4位がまつり（水戸の梅まつり、水戸黄門まつり）、5位が水戸芸術館、6位が水戸城跡（大手門、二の丸角櫓）、7位が納豆、8位が水戸黄門、9位が森林公園、10位が梅となりました。偕楽園、弘道館、水戸城跡は指定等文化財として保存・活用の対象となっているほか、千波湖、水戸の梅まつり、水戸黄門まつり、水戸芸術館、水戸納豆、水戸黄門、森林公園、梅についても、地域計画では未指



定文化財として保存・活用の対象と位置付けており、市民が後世に残したいと思う資産の多くは、地域計画で保存・活用の対象としています。

項目	偕楽園	千波湖	弘道館	まつり	芸術館	水戸城跡	納豆	水戸黄門	森林公園	梅
順位(点数)	第1位(84.7)	第2位(59.9)	第3位(26.1)	第4位(25.3)	第5位(12.4)	第6位(11.7)	第7位(9.5)	第8位(8.4)	第9位(8.0)	第10位(6.1)

表4-7 次世代に残したい資産

(文化財関連項目のみを抽出／出典:『－あなたと描く水戸の未来－ 市民1万人アンケート報告書』2022年)

(2) 水戸の歴史を再発見する市民ワークショップ

本市は、地域計画作成に当たり、市内文化財の印象や課題、保存・活用のアイデアなどを話し合う市民ワークショップを開催しました。開催日は2024（令和6）年2月、参加人数は23名でした。ワークショップの主な結果は次のとおりです。

① 水戸の歴史で興味のある時代

本設問は、ワークショップにあわせて実施したアンケートで、水戸の歴史で興味のある時代について回答を求めたものです。アンケートの結果、近世が1位、中世が2位、近現代が3位、古代が4位、原始時代が5位という結果になりました。本市は「御三家水戸家のお膝元」という意識が高く、近世に興味を抱く割合が多い一方、40%と過半数に届かないこと、中世と近現代をあわせると47%と半数近く占めることなど、近世一辺倒ではない傾向もうかがえました。また、原始・古代については合計で13%と低い傾向もうかがえました。

原始	古代	中世	近世	近現代
5%	8%	27%	40%	20%

表4-8 水戸の歴史で興味のある時代(ワークショップ調べ)

② 水戸らしさを物語る資産

本設問は、「水戸らしさを物語る資産」について回答を求めたものです。アンケートの結果は表4-9のとおりです。水戸市歌やスタミナラーメンなど、従来型の文化財類型にとどまらない自由な発想と、「水戸らしさ」を彷彿とさせるユニークな回答が目立ちました。

地域計画で作成した未指定文化財の集計表（→62ページ）は、本ワークショップでの回答を反映しています。

建造物	水戸駅、水戸駅のからくり時計、常磐線、水戸芸術館、茨城県庁	特産品	水府提灯、水戸黒、農人形、水戸納豆、梅、吉原殿中、水戸の酒、水戸の鮭、鰻料理、スタミナラーメン
美術工芸品	常陸国風土記、大日本史、印籠、備人形、新論	戦争の記憶	水戸空襲
無形文化財	水府流水術、水戸の茶道、水戸市歌	民話・伝説・方言	ダイダラボウ、水戸弁
遺跡	大串貝塚、笠原水道、塩街道、水戸城、備前堀、弘道館、旧制水戸高校跡	遊び	オセロ、郷土かるた
名勝地	水戸八景、水戸の水辺環境、千波湖、那珂川	水戸の景観	水戸の商店街、宮下銀座、ハミングロード
動物・植物・地質鉱物	銀杏坂の銀杏	人物、その他	水戸黄門、横山大観、水戸徳川家、水戸学
行事・イベント	水戸黄門まつり、梅まつり		

表4-9 水戸らしさを物語る資産(ワークショップ調べ)



③ 文化財の保存・活用に向けた施策

ワークショップでは、「市内の複数の文化財をつなぎ、地域の物語（ストーリー）を作るとともに、その保存・活用策を考えてください。」という設問のもと、本市の文化財の保存・活用について議論しました。

議論の結果、次の四つの施策が提案されました。

- **水でつながる歴史と文化**
 - ・「水」を媒介にして水戸の歴史と文化を発信する。
 - ・主な文化財：千波湖、備前堀、笠原水道、小場江堰、那珂川、茶道、水府流水術、河岸、田植歌、秋成新田、水戸城の堀等
- **江戸初期のまちづくり**
 - ・江戸初期のインフラ整備を参考に、令和の笠原水道を整備する。
 - ・主な文化財：水戸城、水戸城下町、笠原水道、千波湖、備前堀等
- **水戸黄門の名跡を生かしたまちづくり**
 - ・皆が知る「水戸黄門」をもとに文化財をつなげ、保存・活用を図る。
 - ・主な文化財：常磐共有墓地、笠原水道、薬王院、六地藏寺、水戸八幡宮、常磐神社、大串稻荷神社、偕楽園等
- **市民会館を核に**
 - ・2023（令和5）年にオープンした水戸市民会館を核に周辺の文化財をつなげ、周遊する。
 - ・主な文化財：水戸城、弘道館、偕楽園、水戸芸術館、水戸東武館、千波湖、東照宮、黄門神社、三木神社、常磐神社、県立歴史館等

以上のワークショップにおける提案は、「水」や「水戸黄門」など、本市の特性を的確に捉えたもので、例示された文化財もユニークなものです。地域計画ではワークショップの提案について、「第3章 本市の歴史文化の特性」や未指定文化財の集計表に反映しています。



水戸市歌制定関連資料(市立博物館所蔵)

現在の水戸市歌は、西条八十の作詞、古関裕而の作曲により、1959年に制定されました。古関自筆の楽譜や、作曲中に苦心したことを記した手紙などが現存しています。

水戸市民会館(泉町)

水戸市民会館は、2023年に開館した、芸術や文化と出会えるまちなかの交流拠点です。建物は本市の歴史的背景と自然環境を取り入れ、周囲の環境と一体化するように設計されました。芸術性と機能性を兼ね備えた特徴ある現代建築です。



第5章

文化財の保存・活用の将来像と 基本方針



偕楽園記碑（常磐町） 偕楽園開設の精神を刻んだ名碑です。



第5章

文化財の保存・活用の将来像と基本方針

第5章では、文化財の保存・活用の将来像とそれを実現するための基本方針を定めます。

1 将来像

「水戸市第7次総合計画－みと魁・Nextプラン」では、将来にわたって発展し、暮らしたいと思える都市を実現するため、目指す将来都市像を「こども育む くらし楽しむ みらいに躍動する魁のまち・水戸」と定めています。

地域計画でも、総合計画に定めた将来都市像の実現に向け、本市の文化財の保存・活用の将来像を次のように定めます。

文化財を^{とも}に楽しみ、^{とも}に伝える
～歴史文化を生かした^{さきがけ}魁のまちづくり～

解説 将来像に込めた意味

主題 文化財を偕に楽しみ、偕に伝える

1842（天保13）年、水戸藩第9代藩主の徳川斉昭は、弘道館と一対の施設として偕楽園を開設しました。園名を「偕楽」とした理由について、斉昭は開園の趣旨を記した「偕楽園記」に、「藩内の多くの者ととともに楽しみを同じくするという本意である」と記しています。（→102ページ）

また斉昭は、「楽」の語に、「単なる娯楽にとどまらず、仕事・学業と休養をバランスよく取り入れることにより、豊かな心を育み、充実した生活を送ってほしい」という意思を込めていました。

将来像の主題「文化財を偕に楽しみ、偕に伝える」には、こうした「偕楽」の精神を踏まえ、市民とともに、地域総がかりで文化財を活用し（偕に楽しみ）、保存する（偕に伝える）という意味が込められています。

副題 歴史文化を生かした魁のまちづくり

斉昭は弘道館に咲く梅を眺め、「雪裡春を占む天下の魁」という漢詩を詠み、他のものを先んずる精神を表す「魁」を強調しました（→102ページ）。

「魁」は、2014（平成26）年に策定された水戸市第6次総合計画の副題である「みと魁プラン」に用いられるなど、本市の都市づくりの精神を象徴する漢字として長く市民に愛されてきました。そして、「魁」は2024（令和6）年度にスタートした第7次総合計画の副題にも「みと魁・Nextプラン」として引き継がれ、先進的な発展をリードする本市の未来を象徴する漢字となっています。

将来像の副題「歴史文化を生かした魁のまちづくり」には、歴史文化を生かしながら、「魁」に象徴される本市のまちづくりに貢献していくという意味が込められています。



2 基本方針

前節で定めた将来像「文化財を偕に楽しみ、偕に伝える～歴史文化を生かした魁のまちづくり～」を実現するための基本方針として、「調査・研究・発信」、「保存」、「活用」、「人づくり」及び「推進体制」の五つの項目を設定します。将来像と各項目の関係は図5-1のとおりです。

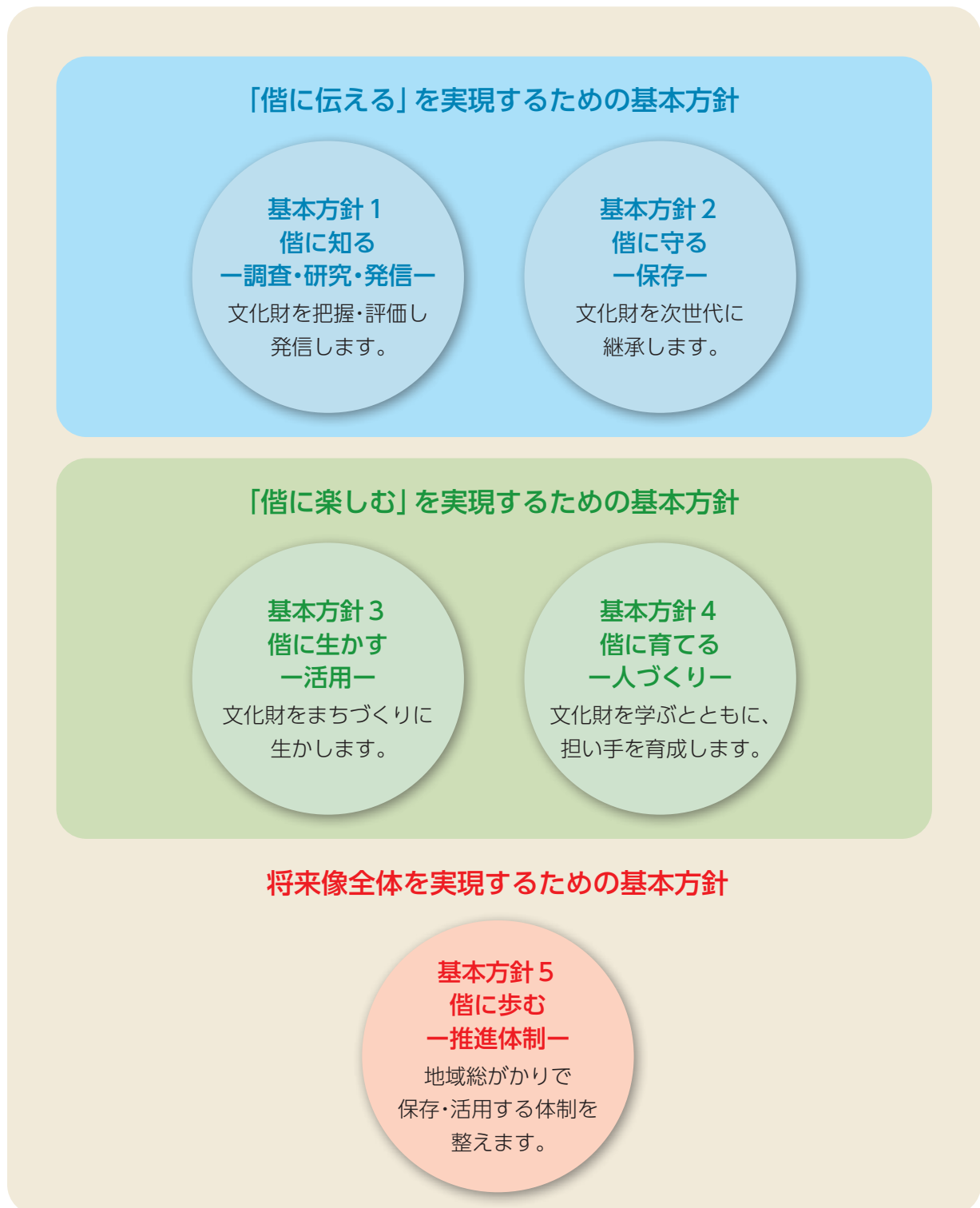


図5-1 将来像と基本方針の関係



コラム 偕楽園記

偕楽園記は、徳川斉昭が偕楽園開設の精神を明示した、約600字の自撰・自筆の文章です。偕楽園開設の3年前に当たる1839（天保10）年に発表されました。

「天に日月あり。地に山川あり。万物を曲成して遺さず。」（天上には日と月があり、地上には山と川がある。自然は万物をこのように一つ一つ細かく完全に造り出している。）で始まるこの文章は、斉昭が宇宙観や人生観といった広大な思想に基づいて、偕楽園の構想を練ったことが分かる名文です。

偕楽園記は高さ2.5メートルの大型の自然石に刻まれ、「偕楽園記碑」として偕楽園内に現存しています（→99ページ）。弘道館に建つ「弘道館記碑」と並ぶ、水戸を代表する石造物です。



偕楽園記碑拓本（弘道館事務所所蔵）

偕楽園記碑は、曲面の多い自然石でできており、文体は流麗な篆書体で書かれています。さらに碑文の周囲には梅樹が描かれています。こうした柔らかで優しいデザインは、庭園の景観に見事に溶け込んでいます。



偕楽園記の暗誦

市立五軒小学校では、児童が偕楽園記碑を暗誦し、梅まつりなどで披露する取組を行っています。

コラム 弘道館に梅花を賞す

弘道館の梅を詠んだ漢詩の中で、最も有名な作品です。斉昭は春に先駆けて咲く梅を弘道館の学生や学びに投影しました。水戸から日本をリードする人材を育てようとする、斉昭の情熱の強さを感じることができます。

読み下し文と現代語訳

弘道館中千樹の梅（弘道館の中には千本の梅の木があり、）

清香馥郁十分に開く（満開に咲き誇り、清らかなよい香りがただよっている。）

好文豈威武無しと謂わんや（こうした梅にどうして勢いが無いと言えようか。）

雪裡春を占む天下の魁（梅は雪の降る中、天下にさきがけて開花し、春を独占する花なのだ。）